

# 居住環境からみる子どもの居場所に関する研究

中島喜代子・廣出 円

A Study on the Children's Place from the viewpoint of Residential Environment

Kiyoko NAKAJIMA and Madoka HIRODE

## 要 旨

本研究は、居住環境から子どもの居場所を家庭・学校・地域別に捉えることを目的としている。そのため、〈大都市〉〈地方都市〉〈農村〉それぞれに居住し、地域との関係が深いと思われる中学生を対象にアンケート調査を行った。また、子どもの生活場面である家庭・学校・地域をトータルに居場所の検討を行った。以下に本稿で明らかとなった事柄について示す。

家庭・学校・地域別に子どもの居場所の実態をみると、居住地域によって居場所の実態に違いがみられた。またこの居場所形成には居住環境が大きく関わっていることが捉えられた。

家庭・学校・地域をトータルにみると、家庭は個人的居場所の中心であり、学校は社会的居場所の中心である。また地域は、家庭における個人的居場所や学校における社会的居場所を補完をする重要な場所であることが捉えられた。しかし、地域は、学校に社会的居場所を所有していない場合の補完の役割は、充分には果たせていないという問題点が明らかになった。

## 1. はじめに

近年、子どもを取り巻く環境は変化している。一方、子どもが引き起こす社会問題は深刻な状況である。これらの社会問題の原因の一つとして、子どもの「居場所」がないという現状が考えられ、今子どもの「居場所」について研究することは、こうした社会問題を考えていく上で必要な事柄であると考えられる。

これまでの子どもの「居場所」に関する研究は、1990年代から教育学・社会学・建築学・住居学系など幅広い分野で研究されているが、研究数はまだ少なく、「居場所」を子どもの生活場面全てから捉えている研究は少ない。また、「居場所」の概念は心理面・物理面両方の側面を含んでいるが、社会学・教育学系は、学校問題の解決を中心に「居場所」を心理面から捉えている研究が多く、本研究室以外の建築学・住居学系では、施設などの利用実態やあり方が中心で、「居場所」の捉え方は、物理面に偏っている。中には、心理面・物理面両方から捉えている研究もみられるが、わずかであり、未だ不十分である<sup>1)~3)</sup>。以上のことは、「居場所」概念の検討<sup>4)</sup>で詳しく述べている。一方、本研究室では、2000年代から、「居場所」は様々な場面で存在すること、「居場所」が心理面・物理面

の両方を含む概念であることを考慮し、子どもの生活場面全体から「居場所」の実態を捉え、心理面・物理面の両方の側面から「居場所」を捉えている。また、最近では、「居場所」の実態を捉えるだけでなく、世代間比較によって現在の子どもの「居場所」の実態や特徴を明らかにした研究<sup>5)</sup>も行っている。

そこで、「居場所」の形成が、居住環境に左右される側面が強いと考えられることから、〈大都市〉〈地方都市〉〈農村〉といった居住地の異なる子どもの「居場所」を比較することにより、それぞれの地域に居住する子どもの「居場所」の実態や特徴を家庭・学校・地域別に捉える。また、子どもが居場所を所有するということは、子どもの生活場面全体において必要であると考えられることから、家庭・学校・地域をトータルに子どもの「居場所」を捉えることを目的とする。

## 2. 調査方法と調査対象の概要

### (1) 「居場所」の定義と「居場所」の分類

本研究における「居場所」は他者から認められたり、他者から自由になって自分を取り戻したりして得られるような「自分を確認できる場所」と定義する。

また、人間が持つ重要な要素である「他者との関わ

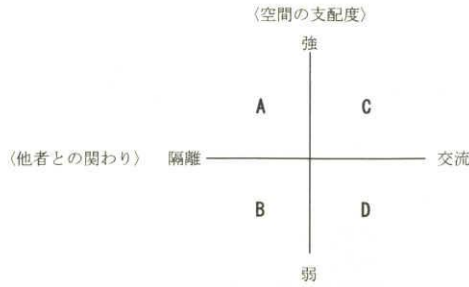


図1 居場所の構造図

り」の視点から、「他者との関わりから離れて自分を取り戻せる場所」を「個人的居場所」、「他者との関わりを持つことで自分を確認できる場所」を「社会的居場所」とする。

さらに「居場所」は物理面・心理面両方を含む概念であるため、物理面を示す「空間の支配度」と心理面を示す「他者との関わり」の二軸で構成する分析軸を設定した。その結果、図1のような4類型を得た。なお、「他者との関わり」の視点で分類すると、A・Bが「個人的居場所」、C・Dが「社会的居場所」となる。<sup>4)</sup>

また、本研究では「個人的居場所」を「①一人になって考え事ができる場所」「②好きなことに集中できる場所」「③一人になってくつろぐことのできる場所」「④大人の目を避けられる場所」「⑤嫌な思いをしたりストレスをためた時にいられる場所」の5つに分類し、「社会的居場所」を「⑥お互いに気が合う人と話をする場所」「⑦仲間だと思える人と話をする場所」「⑧自分を頼ってくれる人と話をする場所」「⑨自分を受け入れてくれる人と話をする場所」の4つに分類し、調査・検討を行った。「個人的居場所」に関しては、隔離・逃避要求の視点から、①②③を心理的に隔離されていれば要求が満たされる低次元の隔離・逃避要求に対応できるもの、④⑤を心理的にも物理的にも隔離が必要な高次元の隔離・逃避要求に対応できるものとする。この分類を図2に示す。「社会的居場所」に関しては、〈交流の仕方〉の視点から、⑥⑦を表面的な交流でも得られる低次元の交流に対応できるもの、⑧⑨を親密な交流によって得られる高次元の交流に対応できるものとする。この分類を図3に示す。

(2) 調査方法と調査対象の概要

居住地域別に子どもの居場所を検討するため、〈大都市〉〈地方都市〉〈農村〉それぞれに居住する子どもを調査対象とすることとし、本研究では〈大都市〉を神奈川県横浜市 T 中学校、〈地方都市〉を三重県名張市 N 中学校、〈農村〉を三重県度会郡南伊勢町 N 中学校に通う子どもに対して、2005年7月～9月に学校に配布・回収をしてもらう方法でアンケート調査を行っ

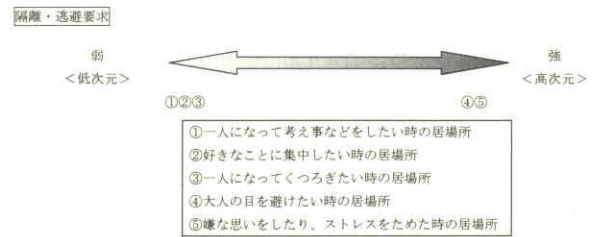


図2 「個人的居場所」概念の分類

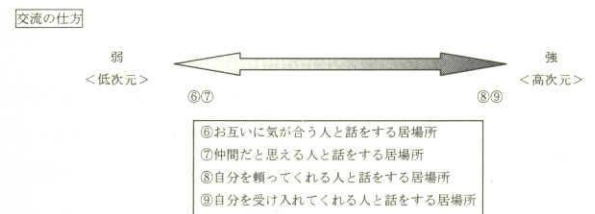


図3 「社会的居場所」概念の分類

た。その結果、647件の有効サンプルを得た。調査の概要を表1に示す。

調査対象の地域について、〈大都市〉とする神奈川県横浜市は、神奈川県庁所在地で都心に近く、産業や交通機関が発達した地域であり、〈地方都市〉とする三重県名張市は、三重県の南西部に位置し、豊かな自然を残しつつ大阪郊外のベッドタウンとして発達した地域であり、〈農村〉とする三重県度会郡南伊勢町は、三重県の南部に位置し、自然が豊かな農村地域である。

調査対象の概要について、表2に示す。学年は、調査協力の関係上、〈大都市〉は3年生のみ、〈地方都市〉は1・2年生、〈農村〉は1～3年生となっている。性別は、3地域とも、性別の割合にほとんど大きな違いはない。平均家族人数は、〈大都市〉が4.6人、〈地方都市〉が5人、〈農村〉が5.8人であり、農村部ほど家族人数が多い。家族形態は、都市部ほど核家族の割合が多く、農村部ほど大家族の割合が多い。居住形態は、〈大都市〉は集合住宅の割合が多く、〈地方都市〉〈農村〉は戸建て住宅の割合がほとんどである。

表1 調査の概要

	大都市	地方都市	農村	全体
配布数(部)	215	459	269	943
回収数(部)	100	286	264	650
回収率(%)	46.5	62.3	98.1	68.9
無効数(部)	0	3	0	3
有効数(部)	100	283	264	647
有効率(%)	100.0	99.0	100.0	99.5

表2 調査対象の概要

学年	大都市		地方都市		農村	
	件数	%	件数	%	件数	%
1年生	0	0	118	41.7	85	32.2
2年生	0	0	165	58.3	94	35.6
3年生	100	100	0	0	85	32.2
合計	100	100	283	100	264	100

性別	大都市		地方都市		農村	
	件数	%	件数	%	件数	%
男	46	46.5	125	44.2	143	54.8
女	53	53.5	158	55.8	118	45.2
無回答	1	—	0	—	3	—
合計	100	100	283	100	264	100

家族人数	大都市		地方都市		農村	
	件数	%	件数	%	件数	%
2人	0	0	5	1.9	1	0.4
3人	5	5.2	12	4.6	13	5.1
4人	52	53.6	85	32.6	43	16.7
5人	25	25.8	87	33.3	49	19.1
6人	9	9.3	44	16.9	74	28.8
7人	5	5.2	22	8.4	46	17.9
8人	1	1.0	3	1.1	26	10.1
9人	0	0	1	0.4	4	1.6
10人	0	0	1	0.4	0	0
11人	0	0	1	0.4	0	0
12人	0	0	0	0	0	1
無回答	3	—	22	—	7	—
合計	100	100	283	100	264	100
平均人数(人)	4.6	—	5.0	—	5.8	—

家族形態	大都市		地方都市		農村	
	件数	%	件数	%	件数	%
拡大家族	14	14.92	84	34.1	161	69.4
核家族	80	85.1	162	65.9	71	30.6
無回答	6	—	37	—	32	—
合計	100	100	283	100	264	100

居住形態	大都市		地方都市		農村	
	件数	%	件数	%	件数	%
戸建住宅	34	35.8	241	94.9	237	95.2
集合住宅	61	64.2	13	5.1	12	4.8
無回答	5	—	29	—	15	—
合計	100	100	283	100	264	100

### 3. 調査結果と考察

#### (1) 居住環境からみる家庭・学校・地域別における子どもの居場所

##### 1) 居住環境・地域におけるよく行く場所

調査対象の家の周りの居住環境について、図4に示す13項目の中であてはまるもの全てを選択する方法で調査した。居住地域別の結果を同図に示す。

調査対象全体の傾向をみると、公園・アスレチック、空き地・駐車場といった子どもが自由に使用できる空間が家の周りにある子どもが多い。また原っぱ・田んぼ・畑、雑木林・野山といった本来の自然がある子どもは、地域の諸施設に関する全ての項目より多く、比較的的自然環境に恵まれている傾向がある。

地域別に比較すると、農村部は自然環境がある子どもが多いが、都市部は地域の諸施設がある子どもが多い。また、〈地方都市〉は自然環境、地域の諸施設について〈大都市〉と〈農村〉の中間に位置するが、雑木林・野山、コンビニ、公共施設については最も少なくなっている。

地域におけるよく行く場所について、図5に示す14項目の中であてはまるもの全てを選択する方法で調査した。居住地域別の結果を同図に示す。

調査対象全体の傾向をみると、友達の家へよく行く子どもが最も多い。また全ての項目について、一人より仲間と地域を利用する子どもが多く、地域では一人より複数で過ごす傾向がある。

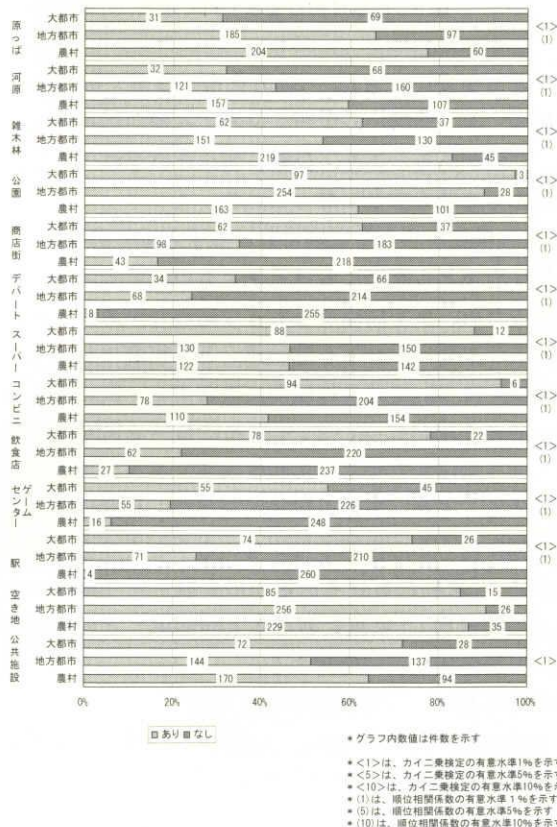


図4 居住環境

地域別に比較すると、農村部は自然があるところ、友達の家、近所の人の家へよく行く子どもが多いが、都市部は店、公共施設、塾といった地域の諸施設へ行く

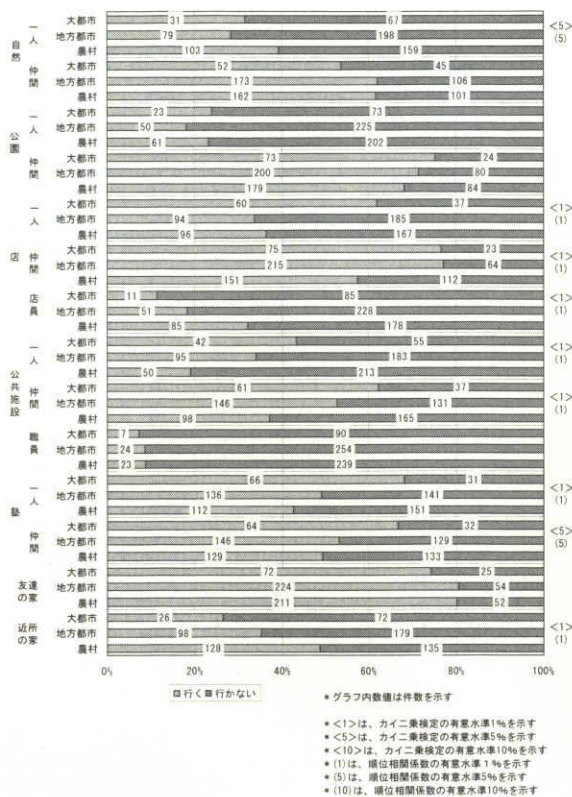


図5 地域におけるよく行く場所

く子どもが多い。また、〈地方都市〉は多くの側面で〈都市〉と〈農村〉の中間に位置する傾向がみられるが、自然があるところ、公園、店へそれぞれ一人で行く子どもは最も少なくなっている。

2) 居住環境からみる家庭における子どもの居場所

居住環境から家庭における子どもの居場所の実態を捉えるため、まず居場所と大きな関わりがあると考えられる「家庭における心理状態」と「家庭における人間関係」について居住地別に検討する。次に個人的居場所の5項目について、「家庭における居場所の有無」と「居場所となる具体的な場所」を居住地別に検討する。また、家庭の居場所所有が、心理状態と人間関係に何らかの影響を与えているかどうかを検討するため、「家庭における居場所の有無」と「家庭における心理状態」「家庭における人間関係」との関連について居住地別に検討する。

①家庭における心理状態

家庭における心理状態は、安心感・安定感・快楽感・満足感・解放感・好感の6側面について、図6に示した選択肢のうち、それぞれあてはまるものひとつを選択する方法で調査した。居住地別の結果を同図に示す。

調査対象全体の傾向をみると、家庭で安心感や安定感を感じている子どもは多いが、満足感や解放感を感じている子どもは少ない傾向がある。

地域別に比較すると、居住地による大きな違いはみら

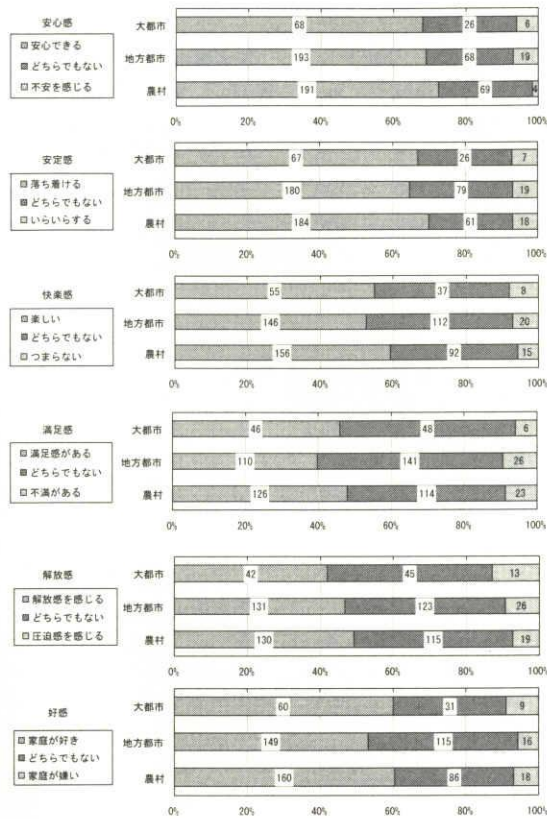


図6 家庭における心理状態

れないが、農村の方が心理状態はやや良い傾向がある。

②家庭における人間関係

家庭における人間関係は、親ときょうだいとの関係について、「本音で会話する」「仲は良いが、気をつかうことがある」「表面上の会話しかしない」の中で、それぞれあてはまるもの全てを選択する方法で調査した。居住地別の結果を図7に示す。

調査対象全体の傾向をみると、親ときょうだいに本音で会話している子どもは最も多いが、気をつかったり、表面上の会話しかしない子どもも約2割みられる。

地域別に比較すると、親・きょうだいに居住地による大きな違いはみられなかった。

③家庭における居場所の実態

家庭における居場所の実態は、個人的居場所5項目について、居場所となる具体的な場所を「A 子ども部屋」「B 家族の部屋」「C 居間・食事室」「D 納戸・衣装部屋」「E 客間・応接間」「F トイレ・風呂」「G 場所がない」「H 家庭ではその行為自体しない」からそれぞれあてはまるものひとつを選択する方法で調査した。その結果をもとに、居場所の有無について、具体的な場所のAからFを「居場所あり」、GHを「居場所なし」として検討する。

居住環境からみる子どもの居場所に関する研究

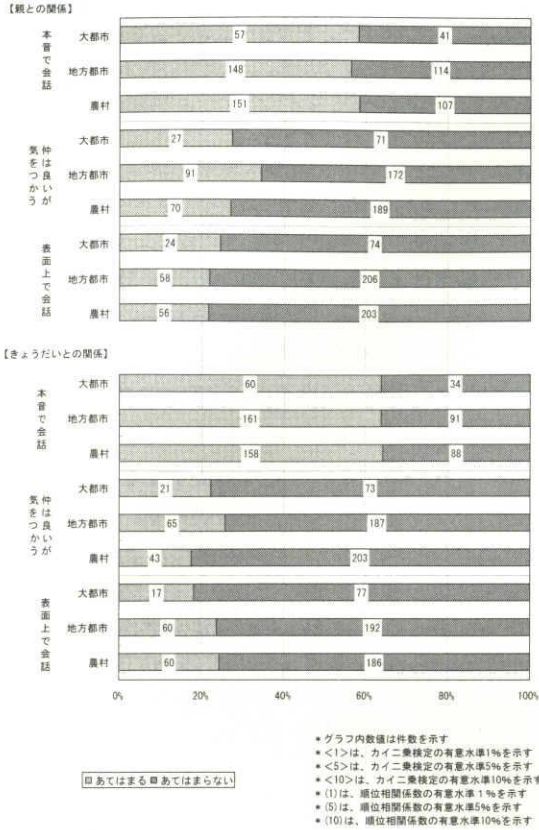


図7 家庭における人間関係

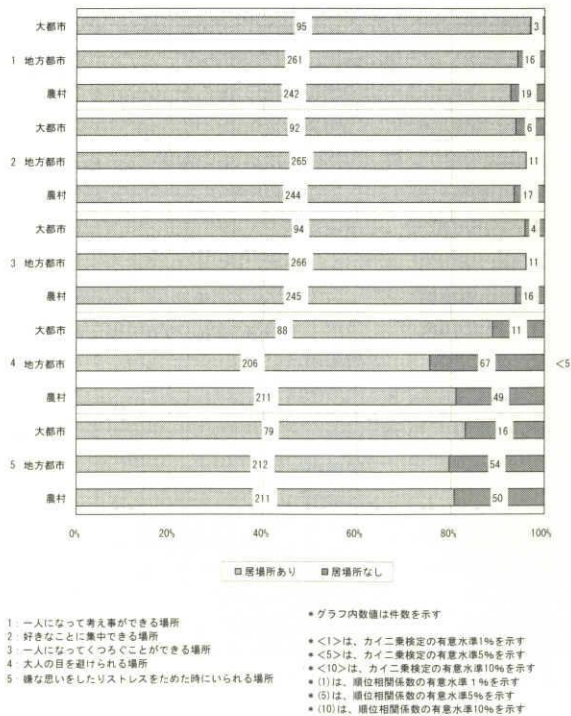


図8 家庭における居場所の有無

i 家庭における居場所の有無について、居住地域別の結果を図8に示す。  
 調査対象全体の傾向をみると、個人的居場所の所有

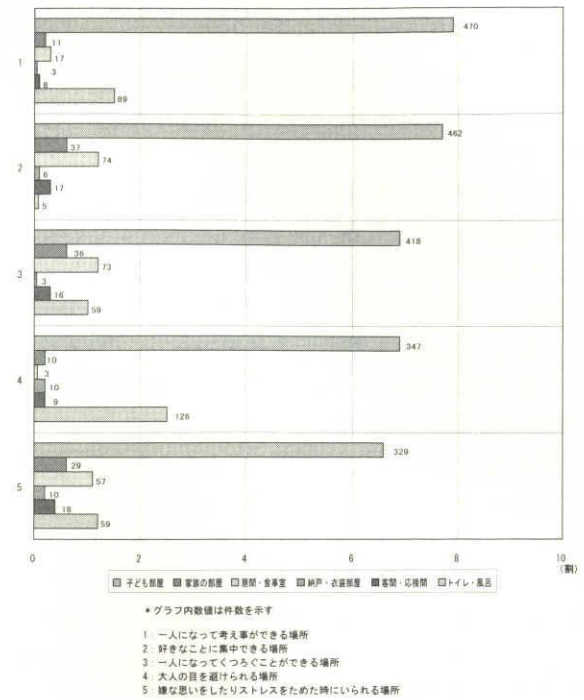


図9 家庭における居場所となる具体的な場所

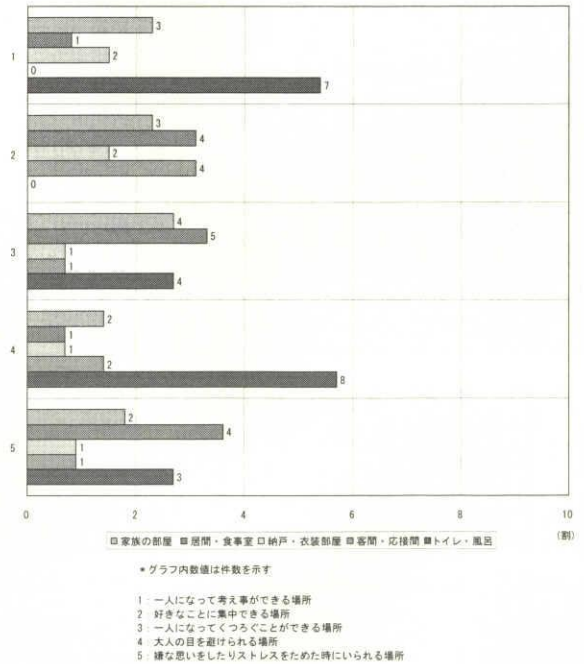


図10 子ども部屋を所有していない子どもの居場所となる具体的な場所

率は約8割から9割と高いが、高次元の個人的居場所は低次元の個人的居場所より低く、所有しにくい傾向がある。

地域別に比較すると、「大人の目を避けられる場所」について、〈地方都市〉の所有率が他の地域と比べて

低い特徴がある。それ以外の項目は、居住地による大きな違いはみられなかった。

ii 家庭において居場所を所有している子どもの居場所となる具体的な場所について、調査対象全体の結果を図9に示す。

調査対象全体の傾向をみると、専用個室である「子ども部屋」を中心に個人的居場所を所有している。「子ども部屋」以外では、「一人になって考え事ができる場所」「大人の目を避けられる場所」では、閉鎖空間である「トイレ・風呂」を居場所とし、「好きなことに集中できる場所」については、開放的空間である「居間・食事室」を居場所とする傾向がある。

地域別に比較すると、居住地による大きな違いはみられなかった。

次に、子ども部屋を所有していない子どもの居場所となる具体的な場所について、調査対象全体の結果を図10に示す。「一人になって考え事ができる場所」

「大人の目を避けられる場所」では、「トイレ・風呂」を居場所とし、「好きなことに集中できる場所」については、「居間・食事室」または「客間・応接間」を居場所とする傾向がある。

④家庭における居場所の有無と心理状態との関連

家庭における居場所の有無と心理状態との関連について、居住地域別の検定結果を表3に示す。表中の○は、カイ二乗検定による有意差、順位相関係数による有意性がみられたことを示し、居場所の有無と心理状態との関連がみられたことを表す。紙面の都合上、居場所の有無と心理状態との関連の結果を示す図は省略する。

調査対象全体の傾向をみると、全ての心理状態の側面において、居場所を所有している子どもほどプラス評価が高く、心理状態は良い傾向がある。

地域別の特徴をみると、〈地方都市〉と〈農村〉は調査対象全体の傾向と同じである。〈大都市〉もほぼ同じ傾向であるが、有意差・有意性まではみられない

表3 家庭における居場所の有無と心理状態との関連

	安心感	カイ二乗検定			順位相関係数			安定感	カイ二乗検定			順位相関係数			快楽感	カイ二乗検定			順位相関係数				
		1%	5%	10%	1%	5%	10%		1%	5%	10%	1%	5%	10%		1%	5%	10%	1%	5%	10%		
大都市	居場所1							大都市	居場所1							大都市	居場所1						
	居場所2						○		居場所2								居場所2						
	居場所3			○			○		居場所3	○					○		居場所3						○
	居場所4								居場所4								居場所4		○				
	居場所5	○					○		居場所5			○			○		居場所5						
地方都市	居場所1			○				地方都市	居場所1							地方都市	居場所1						
	居場所2			○			○		居場所2		○				○		居場所2						○
	居場所3			○			○		居場所3	○					○		居場所3	○					○
	居場所4								居場所4								居場所4		○				○
	居場所5			○			○		居場所5			○			○		居場所5	○					○
農村	居場所1	○					○	農村	居場所1	○					○	農村	居場所1						
	居場所2	○					○		居場所2	○					○		居場所2			○			
	居場所3	○					○		居場所3	○					○		居場所3		○				○
	居場所4	○					○		居場所4			○			○		居場所4						
	居場所5	○					○		居場所5			○			○		居場所5						

	満足感	カイ二乗検定			順位相関係数			解放感	カイ二乗検定			順位相関係数			好感	カイ二乗検定			順位相関係数				
		1%	5%	10%	1%	5%	10%		1%	5%	10%	1%	5%	10%		1%	5%	10%	1%	5%	10%		
大都市	居場所1							大都市	居場所1		○					大都市	居場所1						
	居場所2								居場所2								居場所2						
	居場所3						○		居場所3			○			○		居場所3						
	居場所4								居場所4								居場所4						
	居場所5								居場所5	○					○		居場所5						
地方都市	居場所1			○				地方都市	居場所1							地方都市	居場所1		○				
	居場所2	○					○		居場所2		○				○		居場所2		○				
	居場所3	○					○		居場所3	○					○		居場所3	○					○
	居場所4								居場所4								居場所4			○			
	居場所5	○					○		居場所5	○					○		居場所5	○					○
農村	居場所1			○				農村	居場所1							農村	居場所1		○				○
	居場所2	○							居場所2						○		居場所2		○				
	居場所3	○					○		居場所3	○					○		居場所3						
	居場所4						○		居場所4			○			○		居場所4						
	居場所5								居場所5								居場所5	○					○

- 居場所1：一人になって考え事ができる場所
- 居場所2：好きなことに集中できる場所
- 居場所3：一人になってくつろぐことができる場所
- 居場所4：大人の目を避けられる場所
- 居場所5：嫌な思いをしたりストレスをためた時にいられる場所

居住環境からみる子どもの居場所に関する研究

表4 家庭における居場所の有無と人間関係との関連

親との関係		カイ二乗検定			順位相関係数			きょうだいとの関係		カイ二乗検定			順位相関係数		
		1%	5%	10%	1%	5%	10%			1%	5%	10%	1%	5%	10%
大都市	居場所 1							大都市	居場所 1						
	居場所 2						居場所 2								
	居場所 3						居場所 3								
	居場所 4						居場所 4								
	居場所 5						居場所 5								
地方都市	居場所 1						地方都市	居場所 1							
	居場所 2							居場所 2							
	居場所 3							居場所 3						○	
	居場所 4							居場所 4							
	居場所 5			○		○		居場所 5			○		○		
農村	居場所 1						農村	居場所 1	○			○			
	居場所 2		○					居場所 2		○			○		
	居場所 3	○						居場所 3							
	居場所 4			○				居場所 4						○	
	居場所 5	○			○			居場所 5					○		

居場所 1：一人になって考え事ができる場所  
 居場所 2：好きなことに集中できる場所  
 居場所 3：一人になってくつろぐことができる場所  
 居場所 4：大人目を避けられる場所  
 居場所 5：嫌な思いをしたりストレスをためた時にいられる場所

項目が多く、他の地域より居場所の有無と心理状態との関連が弱い。これは、家庭の居場所を代替できる施設が〈大都市〉に多くあることが家庭における居場所の所有と心理状態との関連の弱さに繋がっているのではないかと考えられる。

⑤家庭における居場所の有無と人間関係との関連

家庭における居場所の有無と親・きょうだいとの関係について、居住地域別の検定結果を表4に示す。紙面の都合上、居場所の有無と人間関係との関連の結果を示す図は省略する。

調査対象全体の傾向をみると、親との関係について、居場所を所有していない子どもは、親に気をつかう傾向がある。きょうだいとの関係については、居場所を所有している子どもは、きょうだいと本音で話し合っている傾向がある。

地域別の特徴をみると、心理状態との関連と同様、〈地方都市〉と〈農村〉は調査対象全体の傾向と同じである。〈大都市〉もほぼ同じ傾向であるが、有意差・有意性まではみられない項目が多く、他の地域より居場所の有無と親・きょうだいとの関連が弱い。これは、居場所の有無と心理状態との関連で述べた理由と同様である。

3) 居住環境からみる学校における子どもの居場所

家庭の場合と同様に、まず居場所と大きな関わりがあると考えられる「学校における心理状態」と「学校における人間関係」について居住地域別に検討する。次に個人的居場所の5項目と、社会的居場所の4項目について、「学校における居場所の有無」と「居場所となる具体的な場所」を居住地域別に検討する。また、学校の居場所所有が、心理状態と人間関係に何らかの

影響を与えているかどうかを検討するため、「学校における居場所の有無」と「学校における心理状態」「学校における人間関係」との関連について居住地域別に検討する。

①学校における心理状態

学校における心理状態は、安心感・安定感・快楽感・満足感・解放感・好感の6側面について、図11に示した選択肢のうち、それぞれあてはまるものひとつを選択する方法で調査した。居住地域別の結果を同図に示す。

調査対象全体の傾向をみると、快楽感を感じている子どもは多いが、その他の側面においてはプラス評価が低く心理状態は悪い傾向がある。

地域別に比較すると、全ての側面において、〈大都市〉は他の地域よりプラス評価が高く、心理状態は良い。

②学校における人間関係

学校における人間関係は、先生・友達との関係について、「本音で会話する」「仲が良いが、気をつかうことがある」「表面上の会話しかしない」の中で、それぞれあてはまるもの全てを選択する方法で調査した。居住地域別の結果を図12に示す。

調査対象全体の傾向をみると、先生とは表面上の会話だけで本音で話し合っている子どもは少ない。友達とは、本音で会話している子どもが最も多いが、気をつかう子どもが約半数も存在する。

地域別に比較すると、先生との関係では、居住地による大きな違いはみられなかったが、友達との関係では、〈大都市〉は他の地域より本音で会話している子どもが多く、友達との関係は良い。

③学校における居場所の実態

学校における居場所の実態は、個人的居場所5項目



図 11 学校における心理状態

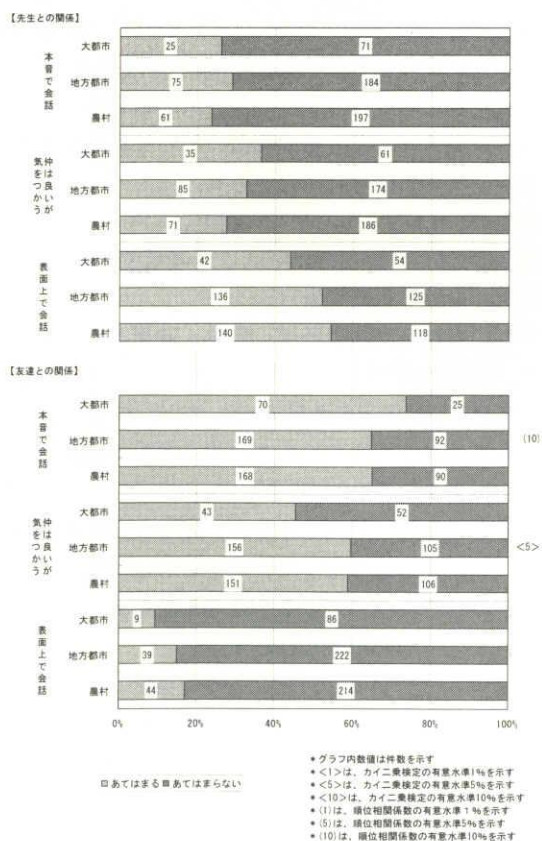


図 12 学校における人間関係

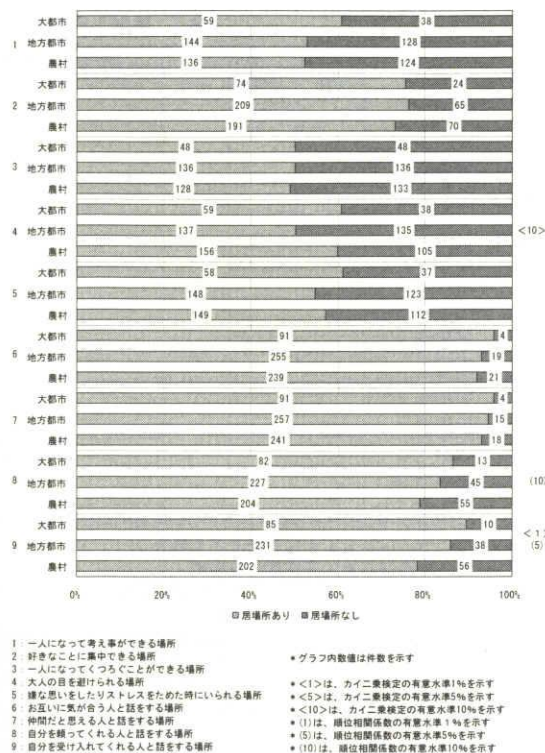


図 13 学校における居場所の有無

と社会的居場所 4 項目について、居場所となる具体的な場所を「A 自分のクラス」「B 他のクラス」「C 部室・委員会の場」「D 体育館・図書室・グラウンド・多目的教室」「E 廊下・トイレ・階段・校庭の片隅」「F 職員室・保健室」「G 場所がない」「H 学校ではその行為自体しない」からそれぞれあてはまるものひとつを選択する方法で調査した。その結果をもとに、居場所の有無について、具体的な場所の A から F を「居場所あり」、GH を「居場所なし」として検討する。

i 学校における居場所の有無について、居住地域別の結果を図 13 に示す。

調査対象全体の傾向をみると、「好きなことに集中できる場所」以外の個人的居場所の所有率は約半数で少なく、学校では個人的居場所を所有しにくい。また、社会的居場所の所有率は約 8 割から 9 割と高いが、高次元の社会的居場所は低次元の社会的居場所より低く、所有しにくい傾向がある。

地域別に比較すると、「大人の目を避けられる場所」について、〈地方都市〉の所有率が他の地域と比べて低い特徴がある。また、社会的居場所については、都市部の所有率の方が高い傾向がみられ、都市部は学校における社会的居場所のウエイトが高いことが捉えられた。

ii 学校において居場所を所有している子どもの居場所となる具体的な場所について、居住地域別の結果を図 14 に示す。

調査対象全体の傾向をみると、「自分のクラス」を



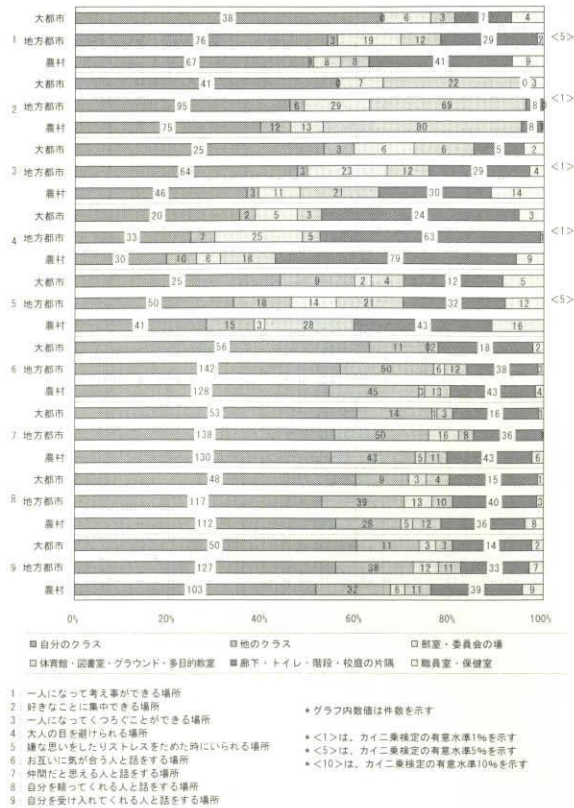


図 14 学校における居場所となる具体的な場所

中心に個人的居場所・社会的居場所を所有している。しかし、「大人の目を避けられる場所」については、「廊下・トイレ・階段・校庭の片隅」を居場所とする傾向がある。また、「好きなことに集中できる場所」では、「自分のクラス」以外に「体育館・図書館・グラウンド・多目的教室」も居場所とする子どもが多いことが捉えられた。

地域別に比較すると、「自分のクラス」を個人的居場所とする子どもは都市部の方が多く、「廊下・トイレ・階段・校庭の片隅」については農村部が多い。これは、土地の関係で、農村部の学校の敷地面積が都市部より広いと、農村部は「自分のクラス」以外に居場所を所有しやすいのではないかと考えられる。

#### ④学校における居場所の有無と心理状態との関連

家庭同様、学校における居場所の有無と心理状態との関連について、居住地域別の検定結果を表5に示す。紙面の都合上、居場所の有無と心理状態との関連の結果を示す図は省略する。

調査対象全体の傾向をみると、全ての心理状態の側面において、居場所を所有している子どもほどプラス評価が高く、心理状態が良い傾向がある。

地域別の特徴をみると、〈地方都市〉と〈農村〉は調査対象全体の傾向と同じである。〈大都市〉もほぼ同じ傾向であるが、有意差・有意性まではみられない項目が多く、他の地域より居場所の有無と心理状態と

の関連が弱い。これは、〈大都市〉の学校における心理状態が相対的に良いため、居場所の有無との関連が弱くなったと考えられる。

#### ⑤学校における居場所の有無と人間関係との関連

学校における居場所の有無と先生との関係・友達との関係について、居住地域別の検定結果を表6に示す。紙面の都合上、居場所の有無と人間関係との関連の結果を示す図は省略する。

調査対象全体の傾向をみると、個人的居場所を所有している子どもは、学校で先生や友達と本音で話している傾向がある。このことから、学校で所有率の低い個人的居場所を所有することが、先生や友だちとの人間関係につながっていると考えられる。社会的居場所は、先生より友達との関係の方が関連が強く、友だちとの関係が良い子どもほど社会的居場所の所有率が高い傾向がある。

地域別の特徴をみると、心理状態との関連同様、〈地方都市〉と〈農村〉は調査対象全体の傾向と同じである。〈大都市〉もほぼ同じ傾向であるが、有意差・有意性まではみられない項目が多く、他の地域より居場所の有無と友達との関連が弱い。これは、〈大都市〉の学校における友達との関係が相対的に良いため、居場所の有無との関連が弱くなったと考えられる。

#### 4) 居住環境からみる地域における子どもの居場所

家庭・学校の場合と同様に、まず居場所と大きな関わりがあると考えられる「地域における本音で話し合える人の有無」について居住地域別に検討する。次に個人的居場所の5項目と、社会的居場所の4項目について、「地域における居場所の有無」と「居場所となる具体的な場所」を居住地域別に検討する。また、地域の居場所所有が、人間関係に何らかの影響を与えているかどうかを検討するため、「地域における居場所の有無」と「地域における本音で話し合える人の有無」との関連について居住地域別に検討する。

##### ①地域における本音で話し合える人の有無

地域における本音で話し合える人の有無について、図15に示す7項目の中であてはまるもの全てを選択する方法で調査した。居住地域別の結果を同図に示す。調査対象全体の傾向をみると、地域で友達と本音で話し合える子どもは多いが、大人と本音で話し合える子どもは少ない傾向がある。

地域別に比較すると、友達と本音で話し合える子どもは〈大都市〉が多く、近所の大人と本音で話し合える子どもは〈農村〉の方が多い。

##### ②地域における居場所の実態

地域における居場所の実態は、個人的居場所5項目と社会的居場所4項目について、居場所となる具体的

表5 学校における居場所の有無と心理状態との関連

安心感	カイ二乗検定			順位相関係数			安定感	カイ二乗検定			順位相関係数			快楽感	カイ二乗検定			順位相関係数		
	1%	5%	10%	1%	5%	10%		1%	5%	10%	1%	5%	10%		1%	5%	10%	1%	5%	10%
大都市	居場所 1						居場所 1		○			○		居場所 1						
	居場所 2	○				○	居場所 2	○			○			居場所 2	○			○		
	居場所 3		○				居場所 3		○			○		居場所 3						
	居場所 4		○				居場所 4			○				居場所 4						
	居場所 5						居場所 5	○				○		居場所 5						
	居場所 6						居場所 6							居場所 6						
	居場所 7	○					居場所 7							居場所 7						
	居場所 8						居場所 8							居場所 8			○		○	
	居場所 9						居場所 9						○	居場所 9						
地方都市	居場所 1						居場所 1							居場所 1			○			
	居場所 2	○				○	居場所 2	○			○			居場所 2	○			○		
	居場所 3	○				○	居場所 3	○			○			居場所 3			○		○	
	居場所 4			○		○	居場所 4		○					居場所 4					○	
	居場所 5	○				○	居場所 5	○			○			居場所 5	○			○		
	居場所 6	○				○	居場所 6	○				○		居場所 6		○			○	
	居場所 7	○					居場所 7			○				居場所 7	○				○	
	居場所 8	○				○	居場所 8	○			○			居場所 8	○			○		
	居場所 9	○				○	居場所 9		○			○		居場所 9		○			○	
農村	居場所 1	○				○	居場所 1		○		○			居場所 1			○		○	
	居場所 2	○				○	居場所 2	○			○			居場所 2	○			○		
	居場所 3	○				○	居場所 3		○		○			居場所 3					○	
	居場所 4		○			○	居場所 4		○		○			居場所 4		○		○		
	居場所 5	○				○	居場所 5	○			○			居場所 5		○			○	
	居場所 6	○				○	居場所 6	○			○			居場所 6	○			○		
	居場所 7		○			○	居場所 7			○		○		居場所 7	○			○		
	居場所 8	○				○	居場所 8	○			○			居場所 8	○			○		
	居場所 9		○			○	居場所 9	○			○			居場所 9	○			○		
満足感	カイ二乗検定			順位相関係数			解放感	カイ二乗検定			順位相関係数			好感	カイ二乗検定			順位相関係数		
	1%	5%	10%	1%	5%	10%		1%	5%	10%	1%	5%	10%		1%	5%	10%	1%	5%	10%
大都市	居場所 1		○				居場所 1		○					居場所 1						
	居場所 2	○				○	居場所 2	○			○			居場所 2	○			○		
	居場所 3						居場所 3							居場所 3						
	居場所 4						居場所 4		○					居場所 4						
	居場所 5			○		○	居場所 5		○			○		居場所 5						
	居場所 6						居場所 6							居場所 6						
	居場所 7						居場所 7							居場所 7						
	居場所 8		○			○	居場所 8			○				居場所 8						
	居場所 9						居場所 9		○					居場所 9		○				
地方都市	居場所 1		○			○	居場所 1			○		○		居場所 1	○			○		
	居場所 2	○				○	居場所 2	○			○			居場所 2	○			○		
	居場所 3	○				○	居場所 3	○			○			居場所 3		○		○		
	居場所 4		○			○	居場所 4		○		○			居場所 4		○		○		
	居場所 5	○				○	居場所 5	○			○			居場所 5	○			○		
	居場所 6	○				○	居場所 6							居場所 6	○			○		
	居場所 7	○				○	居場所 7						○	居場所 7	○			○		
	居場所 8	○				○	居場所 8	○			○			居場所 8	○			○		
	居場所 9	○				○	居場所 9		○			○		居場所 9	○			○		
農村	居場所 1			○		○	居場所 1	○			○			居場所 1	○			○		
	居場所 2	○				○	居場所 2	○			○			居場所 2	○			○		
	居場所 3	○				○	居場所 3	○			○			居場所 3	○			○		
	居場所 4			○		○	居場所 4		○		○			居場所 4	○			○		
	居場所 5			○		○	居場所 5	○			○			居場所 5	○			○		
	居場所 6		○			○	居場所 6		○		○			居場所 6	○			○		
	居場所 7		○			○	居場所 7		○			○		居場所 7	○			○		
	居場所 8	○				○	居場所 8	○			○			居場所 8	○			○		
	居場所 9	○				○	居場所 9	○			○			居場所 9	○			○		

居場所 1：一人になって考え事ができる場所  
 居場所 2：好きなことに集中できる場所  
 居場所 3：一人になってくつろぐことができる場所  
 居場所 4：大人の目を避けられる場所  
 居場所 5：嫌な思いをしたりストレスをためた時にいられる場所

居場所 6：お互いに気が合う人と話をする場所  
 居場所 7：仲間だと思える人と話をする場所  
 居場所 8：自分を頼ってくれる人と話をする場所  
 居場所 9：自分を受け入れてくれる人と話をする場所

居住環境からみる子どもの居場所に関する研究

表6 学校における居場所の有無と人間関係との関連

先生との関係		カイ二乗検定			順位相関係数			友達との関係		カイ二乗検定			順位相関係数		
		1%	5%	10%	1%	5%	10%			1%	5%	10%			
大都市	居場所1		○		○										
	居場所2														
	居場所3														
	居場所4														
	居場所5			○				○							
	居場所6														
	居場所7														
	居場所8														
	居場所9														
地方都市	居場所1			○			○								
	居場所2		○				○								
	居場所3	○				○									
	居場所4														
	居場所5								○			○			
	居場所6														
	居場所7														
	居場所8														
	居場所9														
農村	居場所1	○			○										
	居場所2	○			○										
	居場所3	○			○										
	居場所4								○			○			
	居場所5			○			○								
	居場所6								○			○			
	居場所7								○			○			
	居場所8								○			○			
	居場所9								○			○			

居場所1：一人になって考え事ができる場所  
 居場所2：好きなことに集中できる場所  
 居場所3：一人になってくつろぐことができる場所  
 居場所4：大人の目を避けられる場所  
 居場所5：嫌な思いをしたりストレスをためた時にいられる場所

居場所6：お互いに気が合う人と話をする場所  
 居場所7：仲間だと思える人と話をする場所  
 居場所8：自分を頼ってくれる人と話をする場所  
 居場所9：自分を受け入れてくれる人と話をする場所

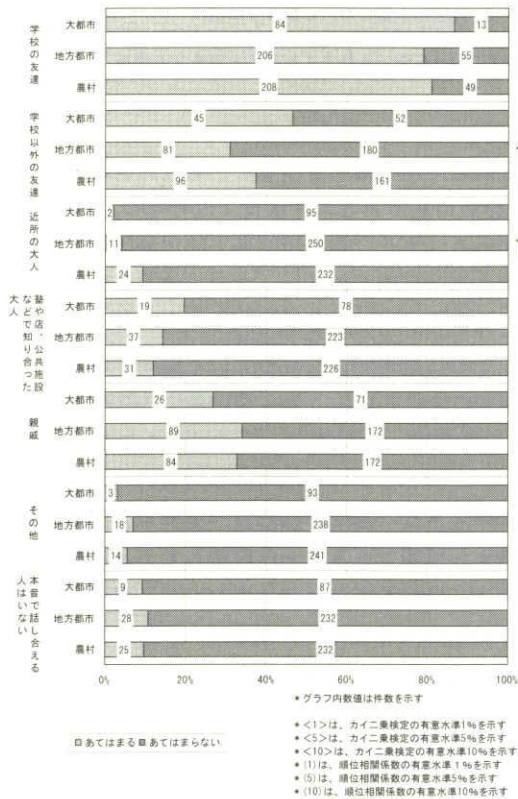


図15 地域における本音で話し合える人の有無

図16 地域における居場所の有無

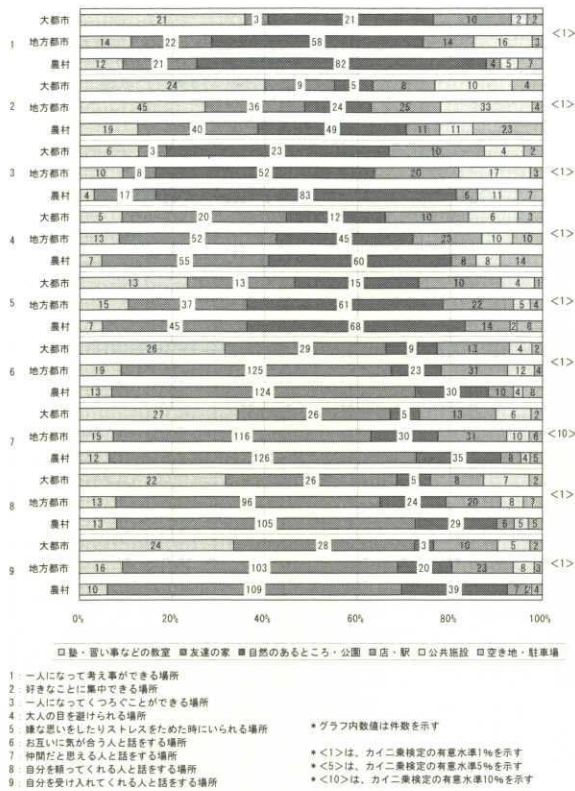


図 17 地域における居場所となる具体的な場所

な場所を「A 塾・習い事などの教室」「B 友達の家」「C 自然のあるところ・公園」「D 駅・店」「E 公共施設」「F 空き地・駐車場」「G 場所がない」「H 地域ではその行為自体しない」からそれぞれあてはまるものひとつを選択する方法で調査した。その結果をもとに、居場所の有無について、具体的な場所の A から F を「居場所あり」、GH を「居場所なし」として検討する。

i 地域における居場所の有無について、居住地域別の結果を図 16 に示す。

調査対象全体の傾向をみると、個人的居場所の所有率は約 5 割から 6 割で約半数である。その中で、「好きなことに集中できる場所」と家庭において所有率の低い高次元の個人的居場所は高い傾向がある。これは、地域は家庭や学校とは異なり、様々な場所があるため、物理的にも隔離できる場所を見つけやすいことが関係していると考えられる。また、社会的居場所の所有率は個人的居場所より約 2 割高く、地域においては、社会的居場所の方が所有しやすい。しかし、その中でも高次元の社会的居場所は低次元の社会的居場所より低く、所有しにくい傾向がある。

地域別に比較すると、「一人になってくつろぐことができる場所」以外の居場所について、〈大都市〉の所有率が最も高い傾向がみられる。

ii 地域において居場所を所有している子どもの居場所となる具体的な場所について、居住地域別の結果を

表 7 地域における居場所の有無と本音で話せる人の有無との関連

	居場所	カイ二乗検定			順位相関係数		
		1%	5%	10%	1%	5%	10%
大都市	居場所 1						
	居場所 2		○				○
	居場所 3						○
	居場所 4			○			
	居場所 5		○			○	
	居場所 6	○					○
	居場所 7	○				○	
	居場所 8	○				○	
	居場所 9	○				○	
地方都市	居場所 1						
	居場所 2						
	居場所 3						
	居場所 4		○				○
	居場所 5			○			○
	居場所 6	○				○	
	居場所 7	○				○	
	居場所 8						○
	居場所 9						
農村	居場所 1		○			○	
	居場所 2		○			○	
	居場所 3	○				○	
	居場所 4						
	居場所 5	○				○	
	居場所 6	○				○	
	居場所 7		○			○	
	居場所 8		○			○	
	居場所 9	○				○	

- 居場所 1：一人になって考え事ができる場所
- 居場所 2：好きなことに集中できる場所
- 居場所 3：一人になってくつろぐことができる場所
- 居場所 4：大人の目を避けられる場所
- 居場所 5：嫌な思いをしたりストレスをためた時にいられる場所
- 居場所 6：お互いに気が合う人と話をする場所
- 居場所 7：仲間だと思える人と話をする場所
- 居場所 8：自分を頼ってくれる人と話をする場所
- 居場所 9：自分を受け入れてくれる人と話をする場所

図 17 に示す。

調査対象全体の傾向をみると、個人的居場所について、「自然のあるところ・公園」を中心に居場所を所有している。また、高次元の個人的居場所は「自然のあるところ・公園」以外に「友達の家」も居場所とする子どもが多い。社会的居場所については、「友達の家」を中心に居場所を所有している傾向がある。

地域別に比較すると、「塾・習い事などの教室」「店・駅」「公共施設」を居場所とする子どもは都市部の方が多い。このことから、都市部の地域における居場所所有率の高さは、地域の諸施設が充実し、居場所を形成しやすい環境であることが関係していると考えられる。一方、農村部は店などは少ないが、自然が豊かなため「自然のあるところ・公園」、戸建住宅多く子ども部屋が広い、友達の家へよく行く子どもが多く「友達の家」が居場所になりやすいと考えられる。

③地域における居場所の有無と本音で話せる人の有無との関連

地域における居場所の有無と本音で話せる人の有無

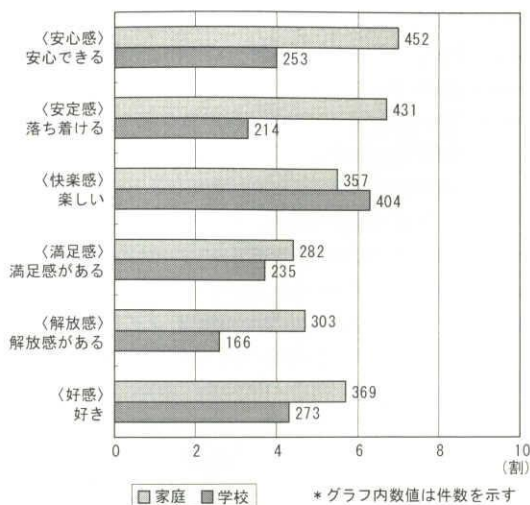


図 18 家庭・学校における子どもの心理状態

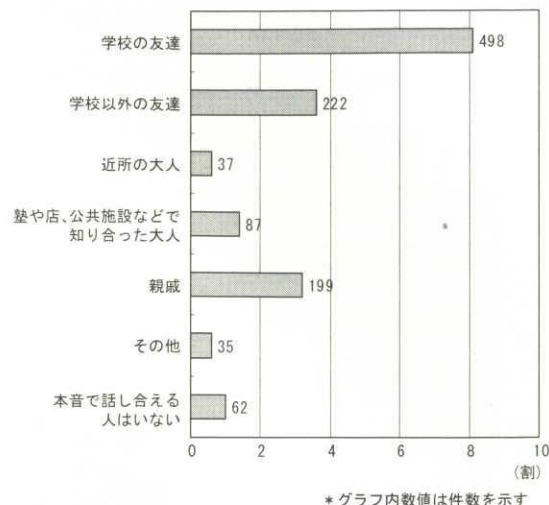


図 20 地域における本音で話し合える人

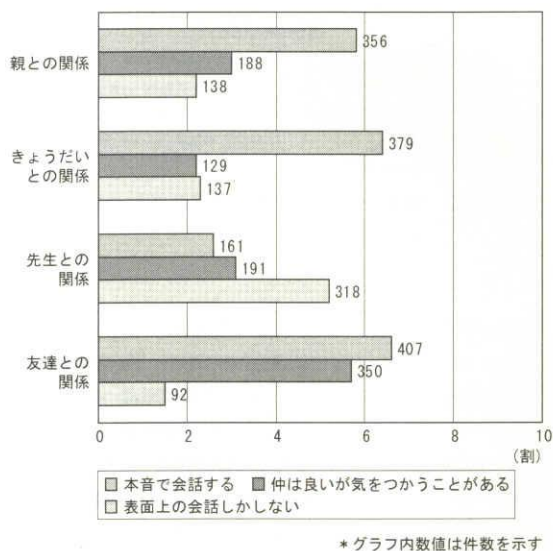


図 19 家庭・学校における人間関係

ついて、家庭・学校・地域における居場所所有率を比較し検討する。

①家庭・学校における子どもの心理状態

家庭・学校における子どもの心理状態について、それぞれのプラス評価の結果を図 18 に示す。

学校における子どもの心理状態は、「快楽感」を除く全ての側面で、家庭よりプラス評価が低く、学校の心理状態は、家庭の心理状態より悪い傾向がみられる。

②家庭・学校・地域における子どもの人間関係

家庭における親・きょうだいとの関係、学校における先生・友達との関係について、結果を図 19 に示す。

きょうだい・友達と本音で会話する子どもは6割以上で、子どもにとって大きな存在であると考えられる親との関係よりやや良い。これは、きょうだいや学校の友達は年齢が近く、本音で話しやすいことが関係していると考えられる。しかし、友達と気がつかって会話する子どもは多く、友達との関係にストレスを抱えている子どもも多くみられる。また、先生と表面上の会話しかない子どもは約半数で最も多く、先生とはあまり親密でない子どもが多いといえる。

次に地域における本音で話し合える人について、結果を図 20 に示す。

地域で学校の友達と本音で話し合える子どもは最も多く、学校の友達は学校だけでなく、地域においても本音で話すことができる大きな存在であると考えられる。一方、大人との関係は弱いことが捉えられた。

③家庭・学校・地域における居場所の所有

家庭・学校・地域における居場所の所有について、結果を図 21 に示す。

個人的居場所については、家庭における居場所所有率が、学校・地域における居場所所有率より高く、家庭は個人的居場所の中心であるといえる。しかし、家

との関連について、居住地域別の検定結果を表 7 に示す。紙面の都合上、居場所の有無と人間関係との関連の結果を示す図は省略する。

〈大都市〉〈地方都市〉〈農村〉全ての地域において、居場所を所有している子どもの方が地域に本音で話せる人がある傾向がある。

(2) 家庭・学校・地域をトータルにみる子どもの居場所

1) 家庭・学校・地域比較による子どもの居場所

家庭・学校・地域をトータルに子どもの居場所の実態を捉えるため、まず居場所と大きな関わりがあると考えられる「家庭・学校における心理状態」「家庭・学校・地域における人間関係」について検討する。次に個人的居場所の 5 項目と、社会的居場所の 4 項目に

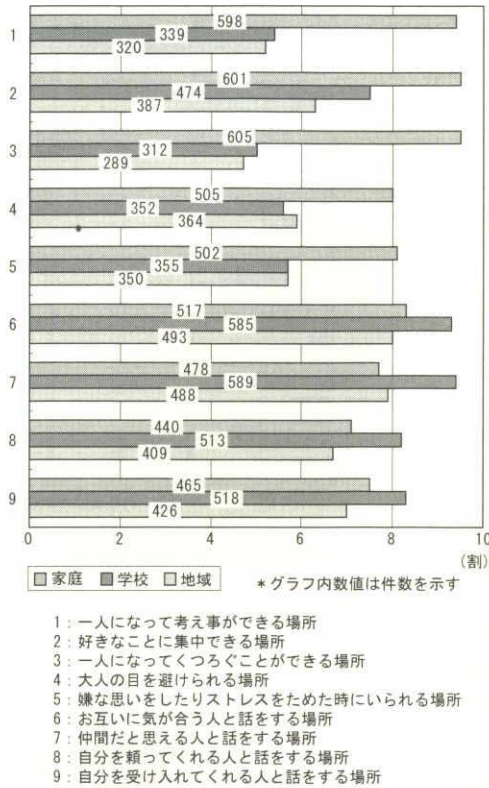


図 21 家庭・学校・地域における居場所の所有

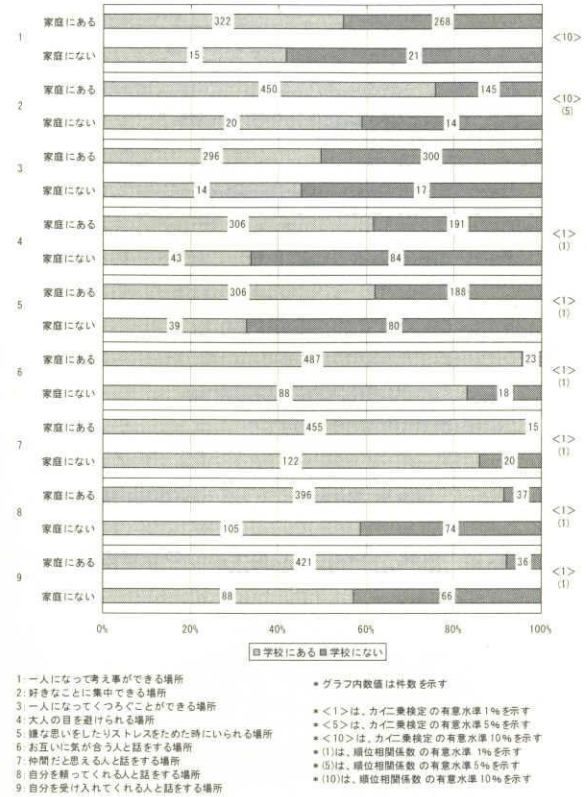


図 22 家庭・学校における居場所の有無の関係

庭でも高次元の個人的居場所の所有率は低次元の個人的居場所より低く、所有しにくい傾向がある。一方、学校・地域における居場所所有率については、低次元の個人的居場所は、学校の方が高いが、高次元の個人的居場所では、地域の方が高いか学校とほぼ同じ割合であり、地域における高次元の個人的居場所のウエイトは高くなっている。したがって、地域は、個人的居場所の中心である家庭において所有率の低い高次元の個人的居場所を補完する役割が大きいと考えられる。また、「好きなことに集中できる場所」については、個人的居場所の所有率が全体的に低い学校・地域でも居場所所有率が高くなっており、個人的居場所の中で最も所有しやすい居場所であるといえる。

社会的居場所については、学校における居場所所有率が、家庭・地域における居場所所有率より高く、学校は社会的居場所の中心であるといえる。また、高次元の社会的居場所については、家庭・学校・地域全体的に、低次元の社会的居場所より低く、所有しにくい傾向がある。

地域について、家庭・学校より過ごす時間が少ないにも関わらず、居場所を所有している子どもが多い。地域は、高次元の個人的居場所の補完について述べたように、高次元の個人的居場所を中心に、家庭における個人的居場所や学校における社会的居場所も補完する役割を果たす重要な場所であると考えられる。

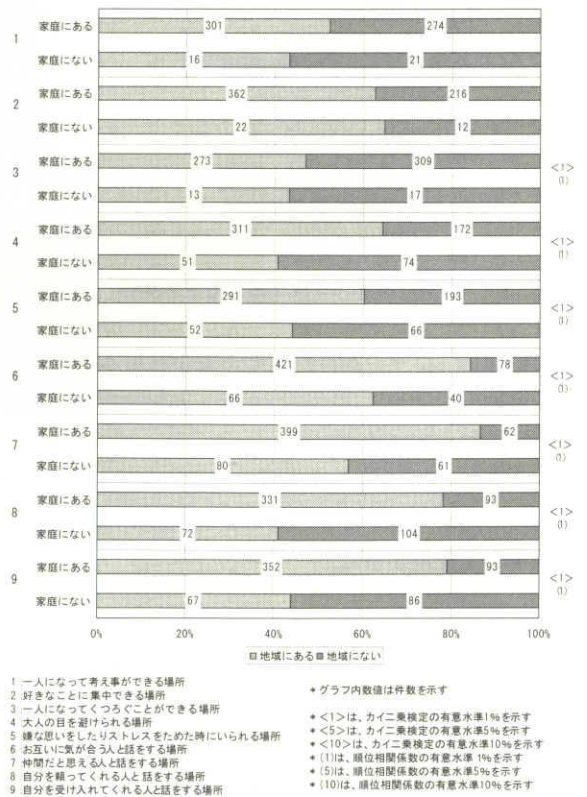


図 23 家庭・地域における居場所の有無の関係

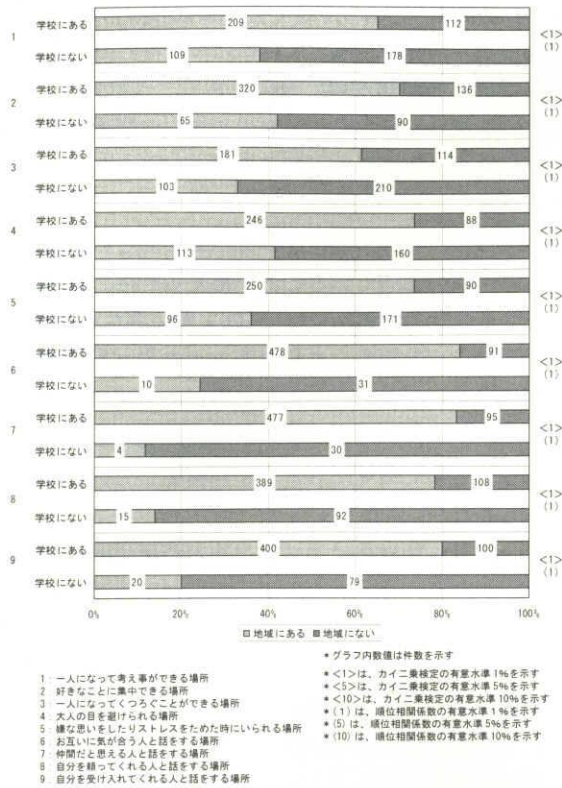


図24 学校・地域における居場所所有の関係

2) 家庭・学校・地域における居場所所有の相互関係

居場所は、家庭・学校・地域がそれぞれ関連なく存在しているのではなく、家庭・学校・地域間で相互に関連していると考えられる。例えば、家庭・学校に居場所を所有していることが地域にも居場所を所有することにつながる関係である「拡張型の補完関係」、また家庭・学校に居場所を所有していない代わりに、地域には居場所を所有する関係である「代替型の補完関係」という2種類の補完関係があるのではないかと考えられる。

そこで、ここでは「拡張型の補完関係」と「代替型の補完関係」の2種類の補完関係を検討する。

①拡張型の補完関係

家庭・学校における居場所所有の関係について、結果を図22に示す。全ての居場所の側面において、家庭に居場所を所有している子どもの方が、学校にも居場所を所有している傾向がみられる。

家庭・地域における居場所所有の関係について、結果を図23に示す。「好きなことに集中できる場所」以外の側面において、家庭に居場所を所有している子どもの方が、地域にも居場所を所有している傾向がみられる。

学校・地域における居場所所有の関係について、結果を図24に示す。全ての居場所の側面において、学校に居場所を所有している子どもの方が、地域にも居

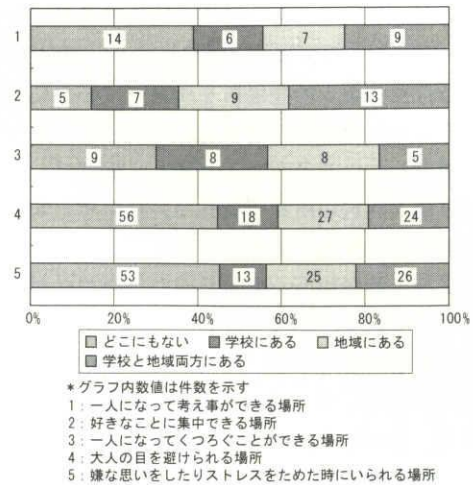


図25 家庭に個人的居場所を所有しない場合の代替型補完パターン

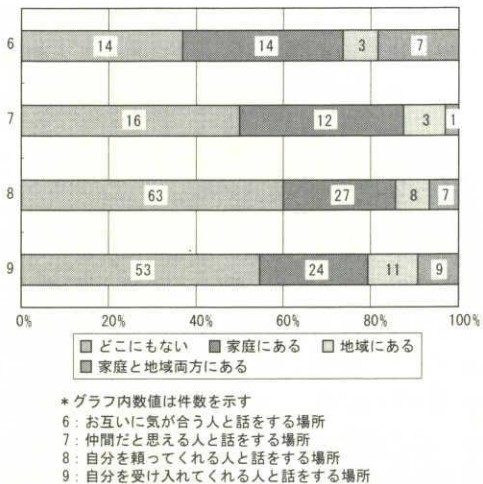


図26 学校に社会的居場所を所有しない場合の代替型補完パターン

場所を所有している傾向がみられる。この関係が、3つの関係のうち最も関連が強い。

以上より、家庭・学校・地域それぞれにおける居場所所有は、他の場所での居場所所有につながっており、拡張型の補完関係があることが捉えられた。

②代替型の補完関係

次に、居場所を所有していない子どもはどこに居場所を所有しているかを検討する。特に個人的居場所・社会的居場所それぞれの中心となる場所に居場所を所有しない子どもに注目し、中心となる場所に居場所を所有していない場合、他の場所が代替補完できているかを検討する。

家庭に個人的居場所を所有しない場合の代替型補完パターンについて、結果を図25に示す。

個人的居場所全ての側面において、家庭に個人的居場所を所有していない子どもの半数以上が、学校、地域、または学校・地域両方のいずれかで補完している。その中でも、家庭に「好きなことに集中できる場所」

を所有していない子どもは学校や地域で補完しやすいが、高次元の個人的居場所は補完しにくい傾向がある。家庭に高次元の個人的居場所を所有していない子どもに注目すると、地域のみで補完している子どもは学校のみで補完している子どもより多く、地域は、家庭に高次元の個人的居場所を所有していない子どもの代替補完をしている役割が大きいと考えられる。

学校に社会的居場所を所有しない場合の代替型補完パターンについて、結果を図 26 に示す。

社会的居場所全ての側面において、学校に社会的居場所を所有していない場合、家庭で補完している子どもが多く、家庭は学校に社会的居場所を所有していない子どもの代替補完の役割をしている傾向がみられる。その中でも、高次元の社会的居場所は低次元の社会的居場所より補完しにくい傾向がある。一方、地域で補完している子どもは少なく、地域は学校における社会的居場所を補完する役割は充分ではないことが捉えられた。

#### 4. おわりに

居住環境から家庭・学校・地域別に子どもの居場所の実態を検討した。また、家庭・学校・地域をトータルに子どもの居場所の実態を検討した。以下に本稿で明らかとなった事柄について示す。

①居住環境については、農村部は自然環境がある子どもが多いが、都市部は地域の諸施設がある子どもが多いことが捉えられた。また、地域におけるよく行く場所については、農村部は自然があるところ、友達の家、近所の人の家へよく行く子どもが多いが、都市部は地域の諸施設へ行く子どもが多いことが捉えられた。

②家庭においては、〈地方都市〉の「大人の目を避けられる場所」の所有率が他の地域より低いことが捉えられた。また、〈大都市〉は他の地域より居場所の有無と心理状態や人間関係との関連が弱い傾向がある。これは、〈大都市〉は家庭の居場所を代替できる施設が地域に多くあることが関連の弱さに影響を与えていると考えられる。

③学校においては、家庭同様、〈地方都市〉の「大人の目を避けられる場所」の所有率が他の地域より低いことが捉えられた。また、都市部の方が社会的居場所の所有率が高くなっており、都市部は学校における社会的居場所のウエイトが高いことが捉えられた。居場所となる具体的な場所では、「自分のクラス」を個人的居場所とする子どもは都市部の方が多く、「廊下・トイレ・階段・校庭の片隅」については農村部の方が多い。これは、土地の関係で、農村部の学校の敷地面積が都市部より広いため、農村部は「自分のクラス」

以外に居場所を所有しやすいことが捉えられた。また、〈大都市〉は他の地域より居場所の有無と心理状態や人間関係との関連が弱い傾向がある。これは、〈大都市〉の学校における心理状態や友達との関係が相対的に良いため、居場所の有無との関連が弱くなったと考えられる

④地域においては、都市部の方がほとんどの居場所の所有率が高い傾向であることが捉えられた。また居場所となる具体的な場所では、「塾・習い事などの教室」「店・駅」「公共施設」を居場所とする子どもは都市部の方が多い。このことから、都市部の地域における居場所所有率の高さは、地域の諸施設が充実し、居場所を形成しやすい環境であることが関係していることが捉えられた。

以上より、居住地によって子どもの居場所の実態に違いがみられ、またこの居場所形成には居住環境が大きく関わっていることが捉えられた。〈大都市〉は家庭のウエイトが低い、学校における社会的居場所の所有率が高く、その延長線上として地域における居場所の所有率も高いことが捉えられた。これは、地域の諸施設が充実していることが関係していると考えられる。一方、〈農村〉は家庭における居場所の所有率では違いがみられなかったが、家庭における心理状態は良く、友達の家へ行き来する子どもが多いため家庭におけるウエイトが高いことが捉えられた。また、〈地方都市〉は家庭・学校ともに「大人の目を避けられる場所」の所有率が低いという特徴が捉えられた。これは、〈地方都市〉の居住環境が、都市部や農村部の居住環境とは異なることが理由の一つとして挙げられるのではないかと考えられる。〈地方都市〉の居住環境は地域に〈大都市〉ほど匿名的に隠れる地域の諸施設が少なく、〈農村〉のように隠れることのできる自然も豊富ではない。また、〈農村〉のように地域の人と密接な関係ではないが、地域に大人の目はあるという逃げられない環境である。この居住環境が、家庭や学校の「大人の目を避けられる場所」の所有率の低さにつながっていると考えられ、〈地方都市〉の居住環境における問題点が明らかとなった。

⑤家庭・学校・地域比較による居場所においては、個人的居場所の中心は家庭であるが、家庭でも高次元の個人的居場所の所有率は低次元の個人的居場所より所有しにくいことが捉えられた。「好きなことに集中できる場所」については、個人的居場所の所有率が全体的に低い学校・地域でも所有しやすい居場所であることが捉えられた。また、社会的居場所の中心は学校であるが、高次元の社会的居場所は、家庭・学校・地域全体的に、低次元の社会的居場所より低く、所有しにくいことが捉えられた。地域は、高次元の個人的居場



所を中心に、家庭における個人的居場所や学校における社会的居場所も補完する役割を果たす重要な場所であることが捉えられた。

⑥家庭・学校・地域における居場所所有の相互関係においては、居場所の所有は他の場所での居場所所有にもつながる拡張型の補完関係であることが捉えられた。個人的居場所の中心である家庭に個人的居場所を所有していない子どもは、学校や地域で補完していることが捉えられた。その中でも、「好きなことに集中できる場所」は補完しやすいが、高次元の個人的居場所の補完はしにくい。特に、高次元の個人的居場所は、学校より地域が代替補完をしている役割が大きいことが捉えられた。社会的居場所の中心である学校に社会的居場所を所有していない子どもは、家庭で補完していることが捉えられた。一方、地域で補完をしている子どもは少なく、学校に社会的居場所を所有していない場合の補完の役割は、充分には果たせていないという問題点が明らかになった。このことから、今後、地域に社会的居場所に成り得るような場所を提供し、政策的に「居場所」づくりを支援する事業を行う必要があると考えられる。

注)

- 1) 桜井康宏・竹田昌美「高校生の生活とストレス・居場所の実態－北陸2県におけるケーススタディー」都市計画論文集、2001年
- 2) 定行まり子・下戸由貴子「中学生の意識からみた家庭、学校、地域における居場所に関する考察」日本女子大学紀要 家政学部第50号、2003年
- 3) 西川知子・小伊藤亜希子・上野勝代 他「地域生活における子どもの居場所－大都市都心部の小学校3校区の調査から－」生活科学研究誌 Vol.2、2003年
- 4) 中島喜代子・廣出円・小長井明美「『居場所』概念の検討」三重大学教育学部研究紀要第58巻、2007年
- 5) 中島喜代子・小長井明美・木屋真依「世代間比較からみた子どもの居場所に関する研究－個人的居場所の場合－」三重大学教育学部研究紀要第57巻、2006年